

2026

HARVARD-YENCHING
INSTITUTE WORKING
PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における
アリスの冒險
**AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S
ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN**

Aoyama Waka | The University of Tokyo

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

Abstract: These essays are the first drafts of chapters for an autoethnographic fiction provisionally titled *Futsuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual): Alice's Adventures in Multilingual Japan*, scheduled for publication in 2027; from June 2024 to February 2027, approximately twenty chapters, including a prologue and an epilogue, are being prepared in Japanese. Based on the author's personal experiences, the work follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese, and portrays her everyday use of multiple languages. Japan is often misunderstood as a "monolingual society," but this work demonstrates that it is, in fact, a "multilingual society," critically reexamining the notions of ordinariness and equality in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored through narratives of homeland loss and regeneration; at the same time, the work encourages critical reflection on our unawareness of the privileges of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies structuring our lives, aiming to evoke readers' own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, the project seeks to explore the possibilities of creating a socially just world, and, in preparation for a future English edition—and to explore the possibilities and limits of translation—English versions of all chapters will also be included.

Keywords: Multilingual Japan, Language Use, Ordinariness and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

要約: 本作は、2027 年度に出版予定の自伝的民族誌的フィクション『ふつうのマルチリンガル—多言語社会日本におけるアリスの冒険』（仮題）の各章の初稿であり、2024 年 6 月から 2027 年 2 月にかけて、プロローグとエピローグを含む約 20 章が日本語で執筆される予定である。著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が日常的に多言語を使う姿を描き、日本がしばしば「モノリンガル社会」と誤解される一方で、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」の概念を言語使用の観点から批判的に問い直す。多様性・共生・植民地主義や戦時加害性・言葉の力といったテーマを故郷喪失と再生の物語を通じて描き出すとともに、「日本語」や「英語」の特権性や生活を形づくる言語的ヒエラルキーへの無自覚さについて批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を呼び覚ますことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的に公正な世界を構想する可能性を探る試みであり、将来の英語版出版に備えると同時に翻訳の可能性と限界を探るために、全章に英訳を付す。

キーワード: マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつう／平等主義、植民地主義・戦時加害性、批判的メタ言語意識

9 スペインの南 Andalucía いつか巡礼に行く前に I

バルセローナ¹

わたしが死んだら、深い土に埋めてほしい、永遠に憶えていてくれる土に。

「暖かい州のはずなのに寒いなあ」。サウスアラバマ大学の留学生仲間に見送られて、モービル空港から出発する。十二月二十日木曜日。アトランタ空港経由でロンドンのヒースロー空港へ向かい、そこからスペインに行くのだ。高校の卒業祝いにおばあちゃんに連れていってもらったときは、ずっと「日本語」だった。グループツアーで、添乗員さんと現地ガイドさんがいて。これから二週間のひとり旅の道連れは、スペイン語。アメリカ合衆国で学んできた言葉。わたしが、わたしのために、わたしがやりたいと決めてえらんだ言葉。わたしをおどろかせ、ほほえませ、謎めいた気持ちにしてくれる言葉。まだ中級クラスに進んだばかりで、わたしのスペイン語(Castellano)はとてもつたない。だからこそ、わくわくする。きっと天使たちに会えるだろう。

旅の入り口は、カタルーニャ州 (Cataluña) のバルセローナ (Barcelona)。スペイン北東部にあり、ピレネー山脈を越えればすぐにフランスとの国境になる。もうすぐ着陸する。雲を抜けると、眼下に広がるのはオレンジ色の屋根がびっしりと並ぶ街。宝石箱のようにまばゆい。細い通りが入り組み、その間を縫うように車が動いている。遠くには青く輝く海が見え、波打ち際が白く光っている。港には白い船が点々と浮かび、背後にはなだらかな丘が広がる。冬の柔らかな陽が街を包み込み、どこか穏やかな風景だった。ほっとした気持ちでバッグージクレイムに行き、スーツケースが出てくるのを待つ。いつまでも出てこない。やがてベルトの動きも止まった。*¿Dónde está mi maleta?* わたしのカバンはどこですか。「*Llegará mañana*(明日着きますよ)」。信じてみよう。

「わたしの名前は、アンヘル (Ángel)」。初老のタクシー運転手さんはひとなつっこい笑顔で言う。「andalusiaのマラガ出身だよ」。あ、ピカソの生まれた町だ。カスティリヤーノ語でガウディの建物を案内してもらえますか。「*Por supuesto* (もちろん)」。おもいがけず、サグダラ・ファミリアの地下聖堂^{クリプタ}のミサにあずかり、ガウディのお墓に手をあわせる。小さく静かで厳かな、飾り気のなさに、気持ちが落ち着いていく。塔にはのぼらずに、バルセローナ中心部から約二十キロ南西にあるサンタ・コロマ・デ・サルバリョ (Santa Coloma de Cervelló) のクロニア・グエイ²に連れていってもらう。ガウディのスポンサーで理解者であるアウゼービ・グエイ³が繊維工

¹ 改稿メモ：スペイン語のカタカナ表記について、強勢のある部分を長音表記にするかどうかなどにつき、この文章では統一されていません。のちのち検討したいと思います。

² カタルーニャ語表記にもとづく。コロニア・グエルという表記は、カスティーリャ語読みに由来する。

³ カタルーニャ語表記にもとづく。グエルという表記は、カスティーリャ語読みに由来す

場を移転し、工場に働く人たちのための生活共同体としてデザインされた住宅地を見てみたかった。

一八九八年、ゲイエは共同体住宅の中心となる教会をガウディに依頼した。アンヘルが言う。「ここ、地下聖堂(cripta)だけ完成していて、上のほうは未完成だから、塔とかないでしよう」。外から見ると石造りの森のよう。中に入ると卵のよう、重力とうまくつきあうために微妙に傾いた柱がどれも異なる形をしている。アンヘルお気に入りのステンドグラスの窓は、外から見ると網がかかっている。「工場で使われる針とリングなのかな」。もう一度中に立つと、黄、緑、青、ばら色のガラスから降りそぞぐ光にやわらかく包まれる。ポーチに出て天井を見上げると、碎いた青いタイルで作られた聖アンドレスの十字架が輝いている。「お昼ごはんに行こう。パ・アム・トウマカット⁴を食べないとね」と言われ、夢うつつのままタクシーに乗り込んだ。

Nit de Natal⁵/Nochebuena⁶

街の灯りがほのかに揺れるイブの夜、石畳の道を歩いていく。サンタ・エウラリア大聖堂が目の前にあらわれる。地元のひとが「ラ・カテドラル」とか「ラ・セウ」（カタルーニャ語で「司教座」を意味する）とかと呼ぶこの聖堂は、昼間よりもずっと大きく、漆黒の空に向かって静かに立っている。石造りの壁は長いときを刻んできた重みにより息づき、気の遠くなるような彫刻が闇のなかで影を落としている。高い尖塔の先から、小さな光が語りかけてくる。扉をくぐると、ふわりとキャンドルの灯りがゆれて、天井の高い堂内に人びとが集まっている。座るように招かれる。ミサが始まる。席におかれていた典礼のプログラムにはカタルーニャ語とカスティリャノ語が併記されていて、ミサそのものはカタルーニャ語で進められていく。

ああ、この光景は決してあたりまえではない。高校時代、同級生から聞いた「スペイン内戦」。それはここに暮らす人びとにとって、自分たちの言葉——カタルーニャ語が奪われた歴史でもあった。フランコ政権下、公共の場での使用が長く禁じられていた。その痛みを、わたしは想像できるだろうか。もっと学び、人びとの声に耳を傾け、自分のあたまで考えなければならない。わたしは無邪気に「スペイン語」（カスティリャノ語）にあこがれ、アメリカ合衆国で英語を通じて学んできた。「スペイン」が複数の言語を抱える国であることの意味をよく考えてこなかった。カタルーニャ語のミサに、見知らぬ人びととともに、何の恐れもなくあずかれること。それがどれほど尊いことか。ミサのおわり、司祭による「派遣の祝福」の言葉が響く。

る。

⁴ カタルーニャ語表記にもとづく。カスティリャノ語表記にもとづけば、パン・コン・トマテ。カンパニュ型の大きなパンをスライスして、オリーブオイルをかけ、ニンニクと横切りにした完熟のトマトをすりつけて食べる、カタルーニャの代表的な料理。

⁵ カタルーニャ語で「クリスマスイブ」の意味。

⁶ カスティリャノ語で「クリスマスイブ」の意味。

「行きましょう、主の平和のうちに」

グラナダ

スペインのなかでもアンダルシアに行きたかった。サウスアラバマ大学でスペイン研究をとり、わたしが「スペイン！」と夢見てきた闘牛、フラメンコ、白壁の村、花の植木鉢で彩られたパティオなどが、アンダルシアの文化と風景に根ざしていると知った。フランコ政権（1939～1975）は、統一と中央集権を掲げ、カスティーリャ的要素を前面に押し出しつつ、観光振興のためにアンダルシア的なイメージを「スペインらしさ」として世界に発信する。その結果、カタルーニャやバスクの文化は公式の表象から退き、アンダルシア的イメージが「スペイン」そのものとして定着していく。それでいて、州民の所得は全国平均よりもなお低い。封建的な大土地所有制度(latifundio)が残っている。ひかり、かけ、かけ(Sol, sombra, sombra)。

グラナダ(Granada)に近づくと、飛行機はゆるやかに降下し、雪をいただくシエラ・ネバダの峰々が迫る。谷が絡み合い、小さな村々が斜面に広がり、川が銀の糸を引き、細い道が農地をぬっている。「アメリカ」で友人になったマリアが出迎えてくれる。グラナダ大学でスペイン文学を学ぶ彼女が言う。ガルシア・ロルカの亡くなった道行きを歩いてみよう。殺された正確な場所は、わかつていない。アルファカールからビスナルへの途上(Camino de Víznar a Alfacar)ということになっている。スペイン市民戦争が始まった一九三六年の八月のある日、ロルカはフランコ派に逮捕され、数日後の未明、ほかの三人と一緒に銃殺された。このあたりでは多くの人が処刑され、集団で埋葬されている。わたしたちは、いま、その道を歩いている、歩いているの。

翌日、アルバイシン地区(Albaicín)を歩きだす。迷路のような路地に吸い込まれそう。たわわに実るオレンジが美味しそう。飾りのためのもので苦くて食べられないよ、とマリアが言う。時間がゆっくり流れていく。サクラモンテの丘(Sacromonte)へ向かう坂は急で息が弾んでいく。いまもロマの人びとが暮らしている。洞窟の白壁に触れながら、マリアが教えてくれる。フラメンコの根っここの部分は歌なの、歌われるだけで踊られないものも多くある。歌に曲名はないのよ、ジャンルだけ、かわりにいろいろな形式があって、たとえば、グラナディーナとか、マラゲニャとか……。午後、サン・ニコラス広場にたどりつく。目の前に広がるアルハンブラ宮殿は夕陽に染まり、金色に輝いている。ロルカの詩をふたりで朗読する。立ち上がり、声を深くして歌う。

Despedida

Si muero,
dejad el balcón abierto.

El niño come naranjas.

(Desde mi balcón lo veo).

El segador siega el trigo.

(Desde mi balcón lo siento).

¡Si muero,
dejad el balcón abierto!

(Federico García Lorca)

別れ

わたしが死んだら、
^{バルコーン}露台を開けたままにしておいて。

子供がオレンジの実を食べる。
(露台から、わたしはそれを見るのです。)

刈り取り人が小麦を刈る。
(露台から、わたしはその音を聞くのです。)

わたしが死んだら、
^{バルコーン}露台を開けたままにしておいて！

(小海永二訳)⁷

ロルカがこの詩を生んだとき、まだ 20 代だったんだよ。え、そうなの？ そうだよ。わたしも、わたしたちも、死んだら…… (Si muerto, si morimos……)。

アルハンブラ宮殿を歩く。イベリア半島を八百年近く支配したイスラームの人びとの栄華のあかし。どこからも水の音がきこえる。シエラ・ネバダから届く水。マリアもわたしも顔をあげる。二姉妹の間の天井は、精緻な装飾で埋め尽くされている。預言者ムハンマドが神の啓示を受けた洞窟が現れるかのよう。大使の間の天井は、ヒマラヤ杉の寄木細工に光を返す細かな紋様が散りばめられている。「これは、北アフリカを故郷とするムスリムの人びとが砂漠で見上げた満天の星空」とマリア。ライオンのパティオをめぐる。ふっくらとした灰色の顔をもつ猫が転がっている。「バシリオ (Basilio)」とマリアが呼ぶ。どこかで聞いた名なのに思い出せない。1492 年 1 月、

⁷ ガルシア・ロルカ著、小海永二訳『ロルカ詩集』グーテンベルク 21、2024 年、73 頁。

グラナダ陥落。その4月、グラナダ近郊のサンタ・フェで、イサベル女王とコロンブスの間で大西洋西廻り航海事業に関する協約をとりかわされる。

セビーリャ

グラナダを出てしまらしくすると、バスはなだらかな丘を越え、視界いっぱいにオリーブ畑が広がった。果てしなく続く木々はまるで、緑灰色の海のよう。風に揺れるたび、葉の波が静かに寄せては返す。陽射しを受けた葉は銀色にきらめき、乾いた赤土との対比がまぶしい。バスの窓越しにその光景を眺めながら、ハトがオリーブの若葉をくわえて戻ってくる姿を浮かべる。あれは大洪水のあとのこと。『創世記』のノアの方舟の物語。神の怒りがおさまり、平和が戻ったしるし。それから、ゲツセマネの園。イエス・キリストが逮捕される前夜に祈りをささげる。それから、聖油も。まって、もっと思い出さなければいけないことがある。もうひとつのオリーブの土地。石を投げて闘う人びと⁸。パレスチナでオリーブの木を植え続けること。抵抗のしるし。

アンダルシア州の州都、セビーリャ (Sevilla) は、地中海からやや離れた内陸部にありながら、グアダルキビル川により大西洋のカディス湾まで大きい船の航行ができる。北アフリカとも近く、交易都市として栄えてきた。なんといっても、コロンブスの航海以降、スペインのアメリカ大陸との交易（インディアス交易）の拠点がセビーリャに集中されたことで、16～17世紀の黄金時代(El Siglo de Oro)のスペインの交易中心地となつた……と、わたしが歴史をたどるのは、「アメリカ」で友人になったペドロが教えてくれるから。メキシコ人の大学院生で、セビーリャに留学して、アメリカ史を研究している。彼に言われて、インディアス総合古文書館(Archivo General de Indias)の前で待ち合わせた。いつものように、少し照れくさそうに、手を振って迎えてくれる。

「ここは、インディアス通商院 (Casa de Contratación de las Indias) だったんだ。1503年につくられた。インディアスへの人や物の出入りをまとめて管理する」。それって、スペインの植民地統治のためのお役所みたいな？ 「そうそう。航海を終えた船がセビーリャの港に着くと、荷はすぐ通商院に運ばれる。そこで富を管理して、王室の財政を支える」。太陽の沈むことなき帝国って、そのおかげ？ 「うん。セビーリャが新大陸につながる拠点だったからこそ成立した帝国だよ」。ラス・インディアス (Las Indias)って、アメリカ大陸の植民地をまとめた呼び名？ 「そう。でもアジアにもあるよ」。アジア？ どこ？ 「フィリピン。<ヌエバ・エスパニョーラ副王領（現在のメキシコ）>の一部だったから」。ああ。「だから、フィリピンもカトリック多いでしょう」。

いまは文書館となり、膨大な資料を保存している。だから、ペドロはここに留学したの？ 「そうでもあり、そうでもない。ぼくはメキシコ・シティの大学を卒業したけ

⁸ アリスの日記によると、第1次インティファーダ（1987年～1993年）の最中だった。

ど、南部のオアハカ州（Oaxaca）に祖父母の代までは住んでいて。わかるかな、いまここにおいて、先住民であるってことの意味が？「ぼくはサポテコ（Zapotec）のルーツをもつ」。ごめんなさい、すぐにはのみこめない、でも、ペドロにとってすごく大事なことを話してくれていることはわかる。「そうか。ぼくは、<ヌエバ・エスパニャ>の歴史をスペイン側の視点だけではなくて、先住民の視点からも見直していきたい」。うん、どうやって？

「まだよくわからない。文書に残っていないことのほうが多い。ほんとうに大切なことは、ここにない声をどう想像するかなんだ。もうひとつ大切なことは、それを僕だけではなく、ほかの人にもしてもらうことなんだ。たとえば、君とか」

聖なるものの影に

それからわたしの目は少し新しくなった。セビーリヤ大聖堂—カトリック勢力による再征服運動（レコンキスタ）前までは巨大なモスクが建っていたという一の主祭壇の黄金の木製衝立の前に立つ。高さ 20 メートル、幅 13 メートル、世界最大、繊細な彫刻により、キリストやマリアの生涯など聖書の 45 場面がほどこされている。中央には聖母マリア。そうだった、アンダルシアはマリア信仰が強く、セビーリヤはその中心地であると、友人のマリアから教わっていた。このまばゆいばかりの芸術を可能にしたのは、どこに由来する資金だったのか。この大聖堂を建てるために労働した人びとは、だれだったのか。その痕跡は文書に残っているのだろうか。すべては残っていないだろう。大聖堂前の石畳につまずき、こっぴどく転ぶ。オレンジの子猫が飛びのく。

サンタクルス街を歩くうち、ペドロはひっそりとした白壁の路地に足を止める。ここはかつてユダヤ人が暮らしていた。小さな広場で腰を下ろし、民族や宗教の共存と断絶について教えてもらう。セビーリヤは奴隸を所有する都市でもあったから、かつてはアフリカ系住民のコミュニティも存在したという。午後の柔らかい光に包まれ、そのままカサ・デ・ピラトス（ピラトの家）へ向かう。「十字架の道行」⁹を思い浮かべる。ムデ哈尔様式とルネサンス様式が融合した空間に、色鮮やかなタイルが溢れんばかりに使われ、漆喰細工の複雑な装飾がどこまでも続く。その晩、バルをはしごし、すすめられるままに「Agua de Sevilla（セビーリヤの水）」を試す。水というのに濃厚で、ほんのり甘く少し酔う。

またね、気をつけて。メキシコに来て。

¡Nos vemos, con cuidado! ¡Ven a México!

⁹ イエスが裁かれたピラト総督の官邸から始まる、キリストの受難をしのぶカトリックの信仰業。イエスが歩いた道を象徴する 14 のステーションをたどる。

ペドロと別れて、ひとりになり、考える。
オリーブの木が何を象徴するかなんて、かんたんには答えられない。

マドリード

Unya, もう一回言わせてね。
OK, lagacané naa guinié' ni sti biaje¹⁰.

わたしが死んだら、深い土に埋めてほしい、永遠に憶えてしてくれる土に。
Kung mamatay ko, ilubong ko sa yutang lalom, nga mahinumduman ko sa kahangturan.

アンダルシアからマドリード(Madrid)へ向かう。うつらうつらとする。「アリス、目を覚まして」。ああ、シダ、久しぶりね、見えないけれど、いつもそこに居てくれるのね。ありがとう。窓の外を眺めてみよう。赤みがかった丘とオリーブの並木が遠ざかるにつれ、土の色が冷たくなっていく。乾いた光に照らされていた南の土地のうねりがなだらかになり、畑はととのい、風はひんやりと透明になる。メセタの台地が静かに広がり、わたしはそこに明るさを見いだそうとする。白壁の家々が姿を消し、かわりに四角く並んだ街並みがゆっくりと浮かびあがる。スペインの首都。カステイリャーノ語—スペイン憲法（1978年）でスペイン国家の公用語と規定されている、わたし가學習している、世界に広がっている言語—を話す人びとが多く暮らしている。

まっすぐに、ソフィア王妃芸術センター (Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía) に行こう。そう思うのに路地で迷う。同じ場所をぐるぐるまわっている。高校生のときに、赤の女王に言われたなあ。「同じ場所にとどまりたければ全力で走り続けなければならない」。わたしはいま、前に進みたい。ふと立ち止まり、ゆっくりと息をはき、歩みをゆるめてみる。すると風景が少しずつ動きはじめる。木々が後ろに流れ、空が青をとりもどし、カフェでくつろぐ人びとのざざめきが聞こえてくる。まっすぐに歩かなくていい。まっすぐに歩かないほうがいい。白い猫にあいさつする。ピカソの「ゲルニカ」の前に立つ。この大きなモノクロームの壁画にいたるまで、ピカソは習作をかさねている。色彩豊かになったり、コラージュしたり、モチーフの配置がかわったり。わたしは、この作品を鏡に何を映し出せるだろうか。

「ゲルニカ」には加害者が描かれていない。ドイツ軍がスペイン北部の都市ゲルニカを空爆したのは、1937年4月26日で、大日本帝国陸軍が中華民国の首都だった南京に侵攻したのがその年の12月、虐殺、略奪、暴行、強姦、放火などの……言葉にしてしまうと、あまりにも……わたしはなにもわかっていない。ただ、ペドロが教えてくれたように、見えていない、聞こえていない存在や、あまりにも悲惨な状態で剥奪された生命や尊厳というものが、あった、ある、ということを想像しなければいけないから、「ゲルニカ」を見ながら、この作品が生まれてきた時代のことを、年表からた

¹⁰ サポテク語。

ぐりよせてみる、せめて。1938年12月から1944年12月、大日本帝国陸海軍航空部隊は、中華民国の臨時首都だった重慶や四川省内に大規模な空爆をくりかえした¹¹。みとめるのはくるしいけれど、わたしもそこにつながっている。

12月31日の晩 (Nochevieja)、プエルタ・デル・ソル(Puerta del Sol)へ。スペインの人びとは、大時計の音とともに新年を迎える。深夜十一時五十九分を過ぎると、だれもが用意してきた「十二粒の幸運のぶどう」 (las doce uvas de la suerte) を手にする。鐘が鳴りはじめ、doce、once、diez、nueve、ochos……と広場でカウントダウンが始まる。思っていたより速い！ わたしはあわてて、ほとんどまとめて口に放り込んでしまう。願いごとを考えるヒマもない。ぶどうで口の中がパンパンにふくらんで、わけがわからない。やがて十二粒目の鐘が鳴り終わると、まわりには笑顔があふれ、だれかれかまわずキスをする人びとが現れる。思わず隣のひとたちとハグする。にぎやかな歓声が空に舞い上がっていく。年越しそばならぬ、チュロスとチョコラテ(churros con chocolate)を食べに深夜のカフェに向かう。

明日にはロンドン経由で「アメリカ」への帰途につく。モービルはあいかわらず寒いだろうか。こちらでエスプレッソ系のコーヒーを飲み続けたから、あちらのドリップ系のコーヒーをすこし頼りなく感じるかもしれない。

シダが、めずらしく、やさしい声で言う。

モービルで怖いことがあるかもしれないけれど、いつか大丈夫になるから。

世界が美しいことを忘れないでほしい。

どこまでも悲惨であるからこそ。

Hasta la próxima.

またね。

¹¹ 改稿メモ：ひとまず、Wikipedia の英語版を参照しています。日本語版では1941年9月までとなっています。どうやら、空爆が激しかった時期がここまでということで、その後も続いていたということのようですが、要ファクトチェック。

Autoethnographic Fiction: Alice's Adventure in Multilingual Japan¹²

**Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo
Waka Aoyama**

Chapter 9 Southern Spain: Andalucía — Before I Go on Pilgrimage I

Note on languages and spellings: In this chapter, Catalan spellings are used for place names and proper nouns in Catalonia (e.g., *Catalunya, Colònia Güell*). Spanish appears in dialogue and quotations as spoken in the moment. When referring to Spanish as a language, I use *Castilian Spanish (castellano)* in keeping with local usage.

Barcelona

When I die, I want to be buried in deep earth—
earth that will remember me forever.

“It’s supposed to be a warm region, but it’s cold,” I think to myself. My fellow international students at the University of South Alabama see me off as I depart from Mobile Airport. Thursday, December 20. I fly via Atlanta to London Heathrow, and from there on to Spain. When my grandmother took me there as a high school graduation gift, everything had been in Japanese. It was a group tour, with a tour conductor and a local guide. This time, my companion for a two-week solo journey is Spanish—the language I studied in the United States. A language I chose, for myself, because I decided I wanted it. A language that surprises me, makes me smile, and fills me with a sense of mystery. I have only just moved into the intermediate level, and my Spanish (Castilian) is still very clumsy. Precisely for that reason, I feel excited. I am sure I will meet angels.

The entrance to the journey is Barcelona, in the autonomous community of Catalonia. It lies in northeastern Spain; cross the Pyrenees and you are already at the French border. We are about to land. Breaking through the clouds, a city spreads out below—rows upon rows of orange-colored roofs packed tightly together. It is dazzling, like a jewel box. Narrow streets twist and turn, cars threading their way through them. In the distance, the sea shines blue, the white line of the shore glowing. White ships dot the harbor, and gentle hills rise behind them. Soft winter sunlight wraps the city in a calm, almost tender scene. Feeling relieved, I go to baggage claim and wait for my suitcase. It does not appear. Eventually, the belt stops moving.

¿Dónde está mi maleta?

Where is my bag?

“Llegará mañana,” they say—it will arrive tomorrow. I decide to believe them.

¹² In this essay, italicization of non-English expressions is used solely for readability and does not imply any hierarchy among languages.

“My name is Ángel.” The elderly taxi driver says this with a warm, friendly smile. “I’m from Málaga, in Andalusia.” Ah—Picasso’s birthplace. I ask if he can show me Gaudí’s buildings, in Castilian Spanish. “Por supuesto.” Unexpectedly, I attend Mass in the crypt of the Sagrada Família and place my hands together in prayer at Gaudí’s grave. Small, quiet, solemn—the lack of ornament calms me. We do not climb the towers. Instead, he takes me to Colònia Güell in Santa Coloma de Cervelló, about twenty kilometers southwest of central Barcelona. I had wanted to see the residential community designed as a place of life for factory workers, after Eusebi Güell—Gaudí’s patron and supporter—relocated his textile factory there.

In 1898, Güell commissioned Gaudí to design the church that would stand at the center of the community. Ángel says, “Only the crypt was completed here—the upper part was never finished, so there are no towers, see?” From the outside, it looks like a forest of stone. Inside, it feels like an egg. Each column, slightly tilted to negotiate gravity, has a different shape. Ángel’s favorite stained-glass window looks covered with mesh from the outside. “Maybe needles and rings used in the factory,” he says. Standing inside again, I am softly enveloped by light pouring down through yellow, green, blue, and rose-colored glass. Stepping out onto the porch and looking up at the ceiling, a cross of Saint Andrew made from crushed blue tiles shines above me.

“Let’s go have lunch—you have to try *pa amb tomàquet*,” he says, and still half-dreaming, I climb back into the taxi.

Nit de Nadal / Nochebuena

On Christmas Eve, the city lights flicker softly as I walk along the stone-paved streets. The Cathedral of Saint Eulalia comes into view. Locals call it *La Catedral*, or *La Seu*—“the episcopal seat” in Catalan. At night it feels far larger than it does during the day, standing quietly against the pitch-black sky. The stone walls seem to breathe with the weight of the long time they have endured, and intricate carvings cast shadows in the darkness that make one dizzy to contemplate. From the tip of a tall spire, a small light seems to speak to me. Passing through the doors, candlelight sways gently, and people have gathered inside the high-ceilinged nave. I am invited to sit. The Mass begins. The liturgical program placed on the seat is printed in both Catalan and Castilian Spanish, but the Mass itself proceeds in Catalan.

Ah—this scene is by no means something to be taken for granted. In high school, I once heard classmates speak of “the Spanish Civil War.” For the people who live here, it was also a history in which their own language—Catalan—was taken from them. Under the Franco regime, its use in public spaces was long prohibited. Can I truly imagine that pain? I must learn more, listen to people’s voices, and think with my own mind. I had innocently admired “Spanish” (Castilian Spanish) and studied it, through English, in the United States. I had not thought deeply about what it means for “Spain” to be a country that holds multiple languages. To be able to take part, without fear, in a Mass in Catalan, together with strangers—how precious that is. At the end of the Mass, the priest’s words of dismissal resonate through the space.

“Go in peace.”

Granada

Among all of Spain, I wanted to go to Andalusia. I had studied Spanish at the University of South Alabama, and the Spain I had dreamed of—bullfighting, flamenco, whitewashed villages, patios decorated with flowerpots—was rooted in the culture and landscapes of Andalusia. Under the Franco regime (1939–1975), unity and centralization were promoted, with Castilian elements pushed to the fore, while Andalusian imagery was presented to the world as “Spanish” for the sake of tourism. As a result, Catalan and Basque cultures receded from official representation, and Andalusian images came to stand for “Spain” itself. And yet, incomes in the region remain below the national average. A feudal system of large landholdings (*latifundio*) persists. Light, shadow, shadow (*sol, sombra, sombra*).

As we approach Granada, the plane begins a gentle descent, and the snowcapped peaks of the Sierra Nevada draw near. Valleys interlace, small villages spread across the slopes, rivers pull silver threads through the land, and narrow roads wind between fields. María, whom I had become friends with “in America,” is there to greet me. She studies Spanish literature at the University of Granada. “Let’s walk the path Lorca took to his death,” she says. “The exact place where he was killed isn’t known. It’s said to be somewhere along the road from Víznar to Alfacar.” One day in August 1936, as the Spanish Civil War began, Lorca was arrested by Francoist forces and, a few days later before dawn, executed by firing squad along with three others. Many people were killed in this area and buried in mass graves. We are walking that road now—walking, walking.

The next day, we set out on foot through the Albaicín district. The labyrinthine alleys seem to pull us in. Oranges hang heavily from the trees, looking delicious. “They’re just for decoration—too bitter to eat,” María says. Time moves slowly. The slope up toward the hill of Sacromonte is steep, and my breath comes faster. Roma people still live here. Touching the whitewashed walls of the cave dwellings, María explains: “At the root of flamenco is song (*cante*). Many forms are sung but never danced. The songs don’t have individual titles—only genres. There are many forms, for example, *granadina, malagueña...*” In the afternoon, we reach the Plaza de San Nicolás. Spread out before us, the Alhambra is bathed in the setting sun, glowing gold. The two of us read Lorca’s poem aloud. We stand, lower our voices, and sing.

Despedida

Federico García Lorca

Si muero,
dejad el balcón abierto.

El niño come naranjas.
(Desde mi balcón lo veo).

El segador siega el trigo.

(Desde mi balcón lo siento).

¡Si muero,
dejad el balcón abierto!

Farewell¹³

If I die,
Leave the balcony open.

The boy is eating oranges.
(From my balcony I hear him.)

The reaper scythes the wheat.
(From my balcony I feel it.)

If I die,
Leave the balcony open!

“He was still in his twenties when he wrote this poem,” María says.

“What—really?”

“Yes. If I die... if we die...” (Si muero, si morimos...).

We walk through the Alhambra. A testament to the splendor of the Islamic peoples who ruled the Iberian Peninsula for nearly eight centuries. Everywhere, the sound of water. Water carried down from the Sierra Nevada. María and I both look up. The ceiling of the Hall of the Two Sisters is filled with intricate ornamentation, as if the cave where the Prophet Muhammad received revelation were about to appear. In the Hall of the Ambassadors, countless fine patterns scatter light reflected from cedarwood marquetry. “This is the star-filled sky that Muslims from North Africa once looked up at in the desert,” María says. We walk around the Court of the Lions. A plump gray cat lies sprawled there. “Basilio,” María calls him. It is a name I seem to have heard somewhere before, but I cannot recall where. In January 1492, Granada fell. That April, in Santa Fe near Granada, Queen Isabella and Columbus concluded the agreement concerning the westward Atlantic voyage.

Seville

Soon after leaving Granada, the bus crosses gentle hills, and olive groves spread across the entire field of vision. The endless rows of trees look like a green-gray sea. Each time the wind passes through, waves of leaves quietly advance and recede. Sunlight catches on the leaves, making them shimmer silver, dazzling against the dry red soil. Watching the scene through the bus window, I picture a dove returning with a young olive branch

¹³ Federico García Lorca, “Despedida,” English translation by Jenny Minniti-Shippey, Academy of American Poets (Poets.org).

in its beak. That was after the great flood—the story of Noah’s Ark in *Genesis*. A sign that God’s wrath had subsided and peace had returned. Then the Garden of Gethsemane, where Jesus Christ prayed on the night before his arrest. And holy oil as well. Wait—there is something else I need to remember. Another land of olive trees. People throwing stones as they fight. Continuing to plant olive trees in Palestine. A sign of resistance.

The capital of Andalusia, Seville (Sevilla), lies slightly inland from the Mediterranean, yet the Guadalquivir River allows large ships to travel all the way to the Bay of Cádiz on the Atlantic. Close to North Africa, the city has long flourished as a trading center. Above all, after Columbus’s voyages, Seville became the hub for Spain’s trade with the Americas—the *Indias* trade—and thus the commercial center of Spain’s Golden Age (the sixteenth and seventeenth centuries). I am able to trace this history because Pedro, a friend I met “in America,” explains it to me. He is a Mexican graduate student studying American history, currently on exchange in Seville. At his suggestion, we meet in front of the Archivo General de Indias. As always, he greets me with a small, slightly shy wave.

“This used to be the Casa de Contratación de las Indias,” he says. “It was established in 1503. It centrally managed the movement of people and goods to and from the Indias.” So it was something like a government office for administering Spain’s colonies? “Exactly. When ships returned from their voyages and arrived at the port of Seville, their cargo was immediately brought to the Casa. Wealth was managed there, supporting the royal treasury.” Is that what made it an empire on which the sun never set? “Yes. It was an empire that could exist only because Seville was the node connecting Spain to the New World.” *Las Indias*—is that the collective name for Spain’s colonies in the Americas? “Yes. But it includes places in Asia as well.” Asia? Where? “The Philippines. They were part of the Viceroyalty of New Spain—what is now Mexico.” I see. “That’s why the Philippines are predominantly Catholic, right.”

Now the building serves as an archive, preserving an enormous collection of documents. So is that why you came to study here, Pedro? “Yes—and no. I graduated from a university in Mexico City, but until my grandparents’ generation, my family lived in the southern state of Oaxaca. Do you understand what it means to be Indigenous, here and now? I have Zapotec roots.” I’m sorry—I can’t fully take it in right away. But I can tell that he is sharing something deeply important to him. “I see. I want to rethink the history of New Spain not only from the Spanish perspective, but also from the perspective of Indigenous peoples.” Yes—but how?

“I don’t really know yet. So much of what matters was never written down. What’s truly important is how we imagine the voices that aren’t here. And another important thing is that it shouldn’t be just me doing that—it should be others as well. For example, you.”

In the Shadow of the Sacred

After that, my eyes became a little newer. I stand before the golden wooden screen of the main altar of Seville Cathedral—which, before the Reconquista, is said to have been the site of a vast mosque. Twenty meters high and thirteen meters wide, the largest of its kind in the world, it is delicately carved with forty-five biblical scenes depicting the lives of

Christ and Mary. At the center stands the Virgin Mary. That's right—Andalusia has a strong devotion to Mary, and Seville is its center, my friend María had once told me. Where did the funds that made this dazzling art possible come from? Who were the people who labored to build this cathedral? Are traces of them preserved in documents? Not everything would have been recorded. I stumble on the stone pavement in front of the cathedral and fall hard. An orange kitten darts away.

As we walk through the Santa Cruz quarter, Pedro stops in a quiet, whitewashed alley. Jews once lived here, he says. We sit down in a small square, and he tells me about coexistence and rupture among ethnicities and religions. Seville was also a city that owned enslaved people; there was once an Afro-descendant community here as well. Wrapped in the soft afternoon light, we continue on to the Casa de Pilatos (the House of Pilate). I think of the Stations of the Cross, the path of Christ's suffering. In a space where Mudéjar and Renaissance styles merge, vividly colored tiles are used in abundance, and intricate stucco decorations extend endlessly. That evening, we go from bar to bar, and at Pedro's urging I try *Agua de Sevilla*—"Water of Seville." Despite its name, it is rich, faintly sweet, and slightly intoxicating.

See you—take care. Come to Mexico.
¡Nos vemos, con cuidado! ¡Ven a México!

After parting from Pedro and finding myself alone, I think.
What olive trees symbolize is not something that can be answered easily.

Madrid

Unya, let me say it again.
OK, *lagacané naa guinié' ni sti biaje*¹⁴.

When I die,
bury me in deep earth,
in earth that will remember me forever.

I travel from Andalusia toward Madrid. I drift in and out of sleep.

"Alice, wake up."

Ah, Shida—the fern that follows me like a quiet companion—it's been a while. Even though I can't see you, you're always there. Thank you.

I look out the window. As the reddish hills and rows of olive trees recede, the color of the soil grows cooler. The undulating southern land, bathed in dry light, gradually softens; the fields become orderly, and the air turns clear and cool. The Meseta spreads out quietly before me, and I try to find a kind of brightness there. The whitewashed houses disappear,

¹⁴ Zapotec language. The line appears here as spoken and remembered, not as a fully mastered or translated utterance.

replaced by city blocks arranged in neat squares. Spain's capital. A place where many people speak Castellano—the language defined by the Spanish Constitution of 1978 as the official language of the state, the language I have been studying, a language spoken across the world.

I decide to go straight to the Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofía. And yet I get lost in the narrow streets, circling the same place again and again. I remember what the Red Queen once said to me in high school: “It takes all the running you can do, to keep in the same place.” I want to move forward now. I stop, exhale slowly, and ease my pace. Then the landscape begins to shift. Trees slide backward, the sky regains its blue, and the murmur of people relaxing at cafés drifts toward me. I don’t have to walk straight. Perhaps it’s better not to. I greet a white cat. I stand before Picasso’s *Guernica*. Before arriving at this vast monochrome mural, Picasso produced countless studies—adding color, experimenting with collage, rearranging motifs. What can I reflect in this work, as if into a mirror?

There are no perpetrators depicted in *Guernica*. The German air force bombed the northern Spanish town of Guernica on April 26, 1937. That same year, in December, the Imperial Japanese Army advanced into Nanjing, then the capital of the Republic of China—massacre, looting, violence, rape, arson... Once put into words, it becomes unbearable. I don’t understand any of it—and that failure of understanding hurts. Still, Pedro taught me, I must imagine those who were unseen and unheard, and the lives and dignity stripped away under conditions too horrific to bear. Standing before *Guernica*, I try, at least, to trace the time from which this work emerged, pulling it toward me through a timeline. From December 1938 to December 1944, the Imperial Japanese Army and Navy Air Forces repeatedly carried out large-scale bombings of Chongqing, then the provisional capital of the Republic of China, and other areas of Sichuan Province. It is painful to acknowledge, but I am connected to this history as well.

On the night of December 31 (*Nochevieja*), I go to Puerta del Sol. In Spain, people welcome the New Year to the sound of the great clock. As 11:59 p.m. passes, everyone takes out the “twelve grapes of good luck” (*las doce uvas de la suerte*) they have prepared. The bells begin to ring, and a countdown echoes through the square—*doce, once, diez, nueve, ocho...* It’s faster than I expected. I panic and shove most of the grapes into my mouth at once. There’s no time to make a wish. My mouth is stuffed with grapes, and I have no idea what I’m doing. When the twelfth bell finishes ringing, smiles spill out everywhere, and people begin kissing anyone in sight. Without thinking, I hug the people next to me. Cheers rise noisily into the night sky. Like *toshikoshi soba* back home, I head to a late-night café for *churros con chocolate*.

Tomorrow I will begin my journey back to “America,” via London. Will Mobile still be cold? After drinking espresso-based coffee here, I might find the drip coffee back there a little unsatisfying.

Shida says, unusually gently:

There may be frightening things waiting for you in Mobile, but someday, it will be all right.

Please don't forget that the world is beautiful—
precisely because it is so deeply, unbearably tragic.

Hasta la próxima.

See you again.